

日頃より気に掛かっていたこと、一つ

研究管理官 佐々 朋幸



森林・林業に関係した多くの研究論文や報告書等を読ませてもらいながら日頃から気に掛かることがあった。それは、文章の結び表現として『・・・が示唆された。』や『・・・を示唆している。』など、あたかも神のお告げかと取れるような表現が余りに多く用いられていること、しかもそのほとんどが『示唆』の対象として既存知見の追認的内容、あるいは研究の終息宣言にも近い自己本位な想像的結論しか挙げていないことである。こうなると、真剣に読ませてもらっている側として、その著者がどんな仮説の下で何を立証したかった研究なのかも分からず、ただの業務報告と自信無さ気な一片の感想を聞かされるだけで少しも科学的興味など湧いてこない。その結果、この種の報告類はノルマ仕事の終了を知らせるための単なる「アリバイ」でしかないと思われ、裏口をたたかれることになったり、森林や林業の研究には「一刻を争うという厳しさが無いから」などと悪口をいわれてしまうこととなる。自己研究資源での自由研究ならいざ知らず、税金使用を認められたことに対する領収書としての論文とは、スポンサーたる国民にはいうまでもなく、世の同業者にも研究の成果や意見を報告するため存在するものである。従って、そこでは、明確、簡潔、平易な説明のもと、『いかなる目的で、何をどのようにして解決したのか』について明示することが義務づけられているはずである。

よく、言葉は生き物といわれる。実際にその通りで、新語といい死語といい、綴り字や語義の変化といい、さらには外国語の輸入といい、長い目でみると言葉は絶えず改変され淘汰されてきた。単語だけでなく言葉の言い回しについても同様であり、科学の世界をみても例外ではない。かつて、科学論文の書き方として物主構文こそが唯一かつ最良の記述方法であるかの如くいわれた。その流れが現在にまで至り、文頭で述べたような第三者的表現へと進化？したのであろうか。すでに述べた通り、国民の負託を受けて研究を遂行する限り、研究者としての報告義務と結果責任を負うのは当然である。この場合、報告者として読者の想像力を刺激し、「なぜだろう」、「どうなるのだろう」などと本気で考えさせるような文章上の技巧も一定程度は必要であろうが、あくまで報告者に求められているものは明確な結果報告なのである。ただ、同じ趣旨のことを表現するにも様々ある。報告には非常に謙遜した書き方をしたものもあるが、度が過ぎると卑屈な感じを与えてしまう。逆に「自分の考え方はこうだ。それは非常に大切なことなのだ。読者も同意する筈だ。」と言わんばかりの自信過剰な表現もその意見が独断的なものではないかと読者を用心させてしまうこととなる。要するに、わずかな表現の違いであっても、そこには日頃の研究姿勢が浮き彫りにされてしまう事実を忘れず、急がずとも、しかし着実な研究結果を基に『・・・を明らかにした。』と論旨を結んでもらいたいものである。

[巻頭言] [[シリーズ1](#)] [[シリーズ2](#)] [[シリーズ3](#)] [[おしらせ](#)]

[[所報トップページへ](#)]